

特集：「会う・話す——『介助現場の社会学』をめぐる対話」

学術論文を記す際に、わたしたちはどのような営みを行っているだろうか。書評論文に限っても、この雑誌（前身の『KG/GP 社会学批評』も含む）のバックナンバーにもあるように、掲載までの課題は、意外と厳しい。書籍の選び方に始まり、著者の議論に内在した理解と評価を行わなくてはならない、それも独りよがりな評価ではなく、先行研究の文脈に沿って当の書籍を適切に位置付けた上で、さらにオリジナリティのある「批評」を展開しなければならない……など、まさに言うは易く行うは難し。これを一人の頭の中だけで考えすぎると、すぐに行き詰まりかねない。他の特集コラムにもあるように、大学院生・研究者も、まさに書籍を「読み」、現場に「行き」、それなりの苦労や悩みを抱えながら、そうした状況を乗り越えようと日々もがいている。

だが、それだけではないだろう。例えば、研究内容を聞いてもらった人から「〇〇さんの本はもう読んだ？どう思う？」とか、「〇〇さん知ってるから、今度、ご紹介しましょうか？」とか言われて、研究が「すすんだ」（ように思える）感覚を覚えた場面はないだろうか。わたしたちはひとりで本を読み、現場を歩くだけでなく、身近な研究者とのかかわりのなかで書籍について「話し」たり、また、実際の著者と「会う」ことによって、議論のなかに「深く入り込む」場合もあるだろう。その過程で、自身にとっての議論の筋道が見えてきたり、文章ではよく掴めなかった内容が頭のなかに「入って」きたり、はたまた、その出会いが当の著者自身にとっても新たな知見をもたらしうるかもしれない。

今回の企画は、そうした「会う・話す」ことによる対話の営みを誌上において再現するものである。『介助現場の社会学——身体障害者の自立生活と介助者のリアリティ』（2009年、生活書院）の著者、前田拓也さんを招いて、聴覚障害者支援のフィールドワークを行う飯塚諒さんと、当事者の立場からひきこもり支援の在り方を調査考察する伊藤康貴さんによる、同書をめぐる対話をこころみることになった。これは前田さんが本学社会学研究科を2009年度に修了した「先輩」であることも大きい。なによりも、障害者やマイノリティ支援のフィールドワークを行う後続世代が入学するなかで、本書が「先行研究」として、しばしば語られるようになったからである。

修了生の本を参照したり、紹介したりするのは、大学院として、ある意味で「当然」の営みのように思えるかもしれない。だが、あまりに当たり前といえる、そのような営みにおいて語られていない部分もあるのではないかと。一般論として、研究をはじめたばかりの若手にとってみれば、書籍を紹介されたはいいが、手に取った時に、そこでの批判対象や紹介された事例は時間が経過しずいぶん前のものになっていることが往々にしてあるだろう。現在とのタイムラグに加えて、自身のテーマや内容との異同もあわせてどう考えればよいのか、判断に迷ったりするだろう。また、紹介する側も「知っている」つもりでいて、本当はよく知らなかったことなどなかったらうか。そして、他ならぬ著者自身は、「今」の時点で出版された書籍のことをどのように考えて

いるのだろうか。しかしながら、このような相互の対話は、往々にしてなされることも、記録に残ることもないように思える。これは、マイノリティと支援のフィールドワークにかかわりながらも、現場も年齢もバラバラな大学院生と研究員、そして著者が「会う・話す」ことを通じて、刊行から5年目を迎える『介助現場の社会学』をめぐる「今」をともに考えなおしてみる（ことをあえて文字化してみる）、そのような企画である。（稲津 秀樹）

〈出席者〉

前田 拓也（神戸学院大学人文学部講師）

伊藤 康貴（日本学術振興会特別研究員／関西学院大学大学院社会学研究科博士課程後期課程）

飯塚 諒（関西学院大学大学院社会学研究科博士課程前期課程）

〈司会・構成〉

稲津 秀樹（関西学院大学ほか非常勤講師）

実施日：2014年1月27日

於：関西学院大学社会学部棟 3F 先端社会研究所セミナールーム

司会（稲津）：今日はお忙しい中、お集まり頂きありがとうございます。主旨説明は終わったので、飯塚さんから、簡単な自己紹介をお願いします。

○ 聴覚障害者の「耳になる」ということ

飯塚：飯塚諒といいます。前田さんには学部の時から色々とお世話になっています。自分は聴覚障害者の支援について研究しています。R会という所に大学院に入ってから通い出して、通訳者・テイカー¹をしています。修士論文は何とか出しました。大学2年生

の時からテイカーをやっていて、その利用者からR会を紹介してもらった形です。

司会：前田さんのフィールド（X会）ともかわりがあると聞いていますけど。

前田：元、X会の人が立ちあげたから、代表の人とかは良く知っています。

司会：社会運動としての繋がりがありますか。

飯塚：運動としてはわかれています。元々、X会に聴覚障害者の組織があったんですけど、2010年にそれがわかれて、今は別の場所で作業していて運動も別でやっています。ただ、何か企画をした時に、X会の場所を借りたり、そこの当事者（身体障害者）の語りや、聴覚障害者が聞くとか、そういう「もちつもたれつ」みたいな関係です。運動というよりも、協力してもらっているような状態です。

司会：つまり、前田さんの本のなかでは、X会として紹介されていた団体の人が独立さ

¹ テイカーとは、大学の講義などで音声情報を文字情報にして聴覚障害者に伝える人のこと。例えば、ノートに文字を書き込むノートテイカー（要約筆記者）や、パソコンを使って議事をとるパソコンテイカーなどがある。

れて、飯塚さんの関わる団体をつくられたというプロセスでしょうか。

飯塚：代表の方は、元々X会でアテンダントというか、コーディネイトをしていたので、すごくX会と関わりが強いですね。

司会：なるほど。そういう経緯のある現場で、テイカーとして入られて修士論文を書かれたと。どのようなことを主題として書かれたのでしょうか。

飯塚：主に通訳支援について書いています。自分がフィールドに行って通訳をしても、上手く聴覚障害者の他の人とコミュニケーションが取れない状況が、見受けられました。それは「何でかなあ」ということで修士論文を書きました。前田さんの本にもあった「介助者手足論」にも絡むんですけど、そこでは、通訳者が聴覚障害者の「耳の代わり」として、介助というよりは「通訳」をしています。

司会：「耳になる」というキーワードがありましたね。

飯塚：情報伝達をする役割として、そう振る舞っているというか、そういう通訳をしていました。ただ、それをしてしまうと、上手くコミュニケーションが取れない状況がどうしてもできてしまう。事例として挙げたのは、例えば目線のやりとりについて、対話相手と聴覚障害者が、目線が合わないことによって会話が発生しにくいとか。通訳者と対話者と聴覚障害者の3人で、どういうやりとりがなされているかという過程を書いて「耳になる」役割だけでは、捉えきれない状況を考えました。

前田：それってでも、自分が書いた時もそれで苦労したんだけど、「当たり前」なんよね。普通の人っていうか、(文脈を知らない)外

の人から見たら、例えば、俺が書いたことで言ったら、介助者はそこに居るけど、空気のよように居るわけにはいかないっていう結論なわけやけど、「当たり前」やん、そんなん。

司会：まさかご自身で「当たり前」と言われるとは予想していませんでした。

前田：ただ、それが当たり前じゃなくて、すごい発見なんやっていうことが伝わるには、だいぶ遠回りして文脈を説明しないとわからへんよね。一旦、介助者は障害者にとって手足の代わりでしかないんだという主張があって、長い歴史、何十年も掛けた葛藤があって、そのうえで「手足」になり切れない健常者、介助者が居るんですけどいう話なわけで。たぶん通訳でも一緒やと思うけど。通訳者が透明じゃなくて、その会話に介入しているとか、干渉してしまっているのは「当たり前」。

司会：その辺り、飯塚さんの方で、この本で描かれている身体障害者と介助者の描き方で、ヒントになる部分や、必ずしもそうではない部分はありましたか。

飯塚：介助者が「手足」となるという歴史の変遷について、すごく参考になりました。というのも、通訳者は耳になりきれないという部分では、前田さんの主張とも重なるところだと思っていますので。ただ、フィールドでの事例として、例えばダーティワークや身体的な接触をめぐる話はなかったです。だから、介助の介入の仕方が、ちょっと違うかなと感じました。

伊藤：具体的にはどういう違いがある？

飯塚：前田さんの本では、介助者のポテンシャルが、当事者の自己決定にある程度左右

されているという部分があって²。確かに聴覚障害者にもそういう所はあります。それ以外にも例えば、通訳者の笑ってしまったりとか泣いてしまったりとか、そういう感情が、「耳になる」ことに対してそのまま影響を与えているというか。

司会：通訳者が泣く。

飯塚：通訳者が通訳中に何かしらの感情を「表」に出すこと自体が、コミュニケーションでそのまま相手に伝わってしまう。そういう所で、確かに「手足」だったら、笑いながらコップを取っても泣きながらコップを取っても、たぶん結果としては似ている部分はある。通訳における介助はどちらかというと、感情そのものが情報として伝達されて、影響を与える度合いが違うと思います。あと、介助者がそこに居ることで、コミュニケーションの「質」が変わるとか、そういう所が違うのかなあと。

司会：「耳になる」ことと、当事者の自己決定の問題はどう考えたらよいですか。例えば、「このコップを取ってください」という指示があって、「じゃあはい、渡しますよ」というプロセスがあるとして、仮に身体的には「手足」になれる部分があるとしても、聞こえている音声の判別がそもそも難しい場合には、それこそ何を聞きたいかといった点について、どこまでその決定が当人にできるのか。それが「介入の仕方の違い」という点とも関連して、聴覚障害の現場でテイカーになるときに問われている、という理解で良いですか。

飯塚：そうですね。初めに説明しておいた方が良かったかもしれないですけど、自分の対象にしている通訳は、日常生活における

通訳です。例えば公演のように、聴きたい目的があってそこに通訳者が居るというわけじゃなくて、聴覚障害者の人が普段、人と接する時のコミュニケーションとか日常会話とか、そういう際の通訳を対象にしています。当事者の自己決定は、やっぱり曖昧な所があって、会話で、何かの情報を聞きたいから通訳を付けるとか、そういう明確な目的が、ちょっと見えにくい部分があります。日常的な会話でこういう情報が得られるから通訳を付けるというふうな発想には、当事者には至りにくい部分があります。会話されていることはわかるんですけど、その会話でどういう情報が飛び交っているのかというのは通訳を付けて初めてわかることなんで。その会話にアクセスしようっていうふうに思うのには、その会話で何かを知りたいという目的がある。でも、その会話で何をなされているかっていうことが、ゼロに近いほどわからないので、その面では、自己決定という面ではちょっと語りにくい部分があります。

前田：そこはまだ先を急がずに、もうちょっとゆっくり考えていった方が良いと思う。

○ 支援における感情とトラブル

前田：まず、感情が入るどころって話は、そこまで単純じゃなくって。たとえば、「あれ取って」って言われたモノを、ガンって置いて渡したら、「怒ってるやんか」って思われてしまうでしょ。でも、滅茶苦茶忙しい時に、「今言うなよ、もうちょっと待ってよ」みたいなことだってあるわけよ、それは。こっちで仕事やってんのに、あれやれこれやれって次々言われる場合が。「わか

² 「what to do/how to do」(前田 2009: 64)

ってくれよ」っていう時もある。そういうときなんかは、やっぱりちょっと怒った感じになってしまうこともあるよね、それは。だから、逆に言語じゃなくて動作やから変に伝わってしまうっていうこともあるし、読み込まれてしまうこともあるわけ。ノンバーバルな方が変に意味を読み取られてしまう。言葉で言うよりも。別に深い意味がなくて、そうなる場合もちろんあるんよ。そういうのは例えば、俺とかは、人相悪いし怖そうなおっさんやから、だから何ちゅうの、怒ってるって思われたりとかしがちな人間やと思う。この人は怒ってるんちゃうかとか、怒られそうや、怖い介助者やって思われてるかも知れないし、その何か、変にこう意図してない所で感情を読み込まれてしまうところもあるし、あるいは、実際に出してしまっている部分もあるし。そんなこと何も思っていないけど、勝手に向こうが、こっちの意図を読む場合はありますね。勘違いやけども。物をバーンと置いたりして、別にたまたまそうなただけかもしれない。だからほんまにイラっとしてる。イラっとしているけど、伝えようとしてないっていう場合もある。それは一番多いパターン。ばれないように、要するに感情操作、感情労働¹としてそれをやってんねんけど、うっかり伝わってしまう場合。それはだから、感情が入らない、フラットにそういう動作をやれば良いっていうものでもない。

飯塚：確かに、コップをバーンって置くのと、普通に置くのは違うと思うんですけど、それって介助者と障害者の関係のなかで、たぶんそういうのが起きていると思っていて。でも、物は置けていると思うんですよね。バーンって置くのも、フラットに置くのも、物は置けている、行為自体は成功している。成功しているって言ったら変ですけど、行為としては達成している部分もある。ただ、通訳の時はちょっと違って、そのバーンって置くこと自体に、もう感情が入る。つまり怒って言うのと普通に言うのとでは内容が、コミュニケーションの内容が変わってくるので、そういう面でかなり色濃く出る。

前田：それがトラブルとして両者に認識されるかどうかじゃない？たぶんね。さっきの物を置くという動作は成功しているっていうのは確かにそうなんやけど、だから問題になりにくいっていう問題があるわけでしょう。どんなふうに置こうが、「物を置く」っていうことそれ自体は成功しているんやから、それでええやんっていうので、その場で問題としてフレームアップされないといいか。だからそれが、どんどん溜まっていく。あの介助者は、何かいつも態度が悪いとか、雑な物の置き方しよるとか、でも置けるからええやんけ、それで物がこぼれたわけじゃないからええやんけって話で、その場その場がスルーされていって、だから、介助が結果的に成功しているからややこしいっていう話。

飯塚：隠れちゃうっていうか見えなくなる。

前田：両者の間で問題として語られることがない。「耳としての介助」っていう意味で言うと、それは「何でそんな言い方になんの？」

¹ Hochschild, Arlie Russell, 1983, *The Managed Heart: Commercialization of Human Feeling*, University of California Press (=2000、石川准・室伏垂希訳『管理される心——感情が商品になるとき』世界思想社)。

みたいなことが問題になるの？

飯塚：通訳者のなかで問題になるという感じ
です。当事者にとっては、通訳者に与えら
れた情報が全てという部分があって、何で
通訳者があそこで笑ってしまったとか、泣
きそうになってしまったとか、そういうこ
とで反省するっていう面が多いです。問題
になるかと言われたら、曖昧なところかも
しれません。

前田：だから、それが「正しく翻訳されてな
い」という認識が、利用者にはないって
ことなん。

飯塚：それはないです。

前田：そんなふうに考える契機がないって
いうこと？気付けない？

飯塚：気付きにくい。

司会：当事者からの問いかけは、あったりし
ないんですか。例えば、翻訳対象が明らか
にすごい喋っているのに、これだけしか伝
えられてないやん、みたいな。

前田：映画の字幕とかでもあるよね。「少なっ
て。「もっといろいろ言うてるやろ」とこ
と。

司会：シンポジウムや大学での通訳場面でも
ありますよね。そういう場合の、問いかけ
やリアクションはありますか。

飯塚：明らかに情報に差があったら、たぶん
あると思うんですけど。例えば、微妙なニ
ュアンスであったりとか、そういうことに
対しては、やっぱり気付かない部分が多くて。

前田：それ、わかっているのは通訳者だけって
こと？

飯塚：そうなります。

司会：さっきの前田さんの問題提起に戻れば、
そのトラブルとして認識されているかどう
かは、あくまで通訳者側が問題にしている

ってことですよ。当事者側からの考えや
レスポンスを得る機会はないですか。

飯塚：通訳が終わった後に、「面白くなかった」
とか「楽しかった」とか、そういうレスポ
ンスはあるんですけど、具体的にどこの部
分に情報をもっと欲しかったとか、そうい
うレスポンスは特に私は聞かないですね。
自分が知りたいと思ったら、たぶん障害者
自身も尋ねたり、対話相手に質問すること
はあると思うんですけど。通訳に関して、
とりわけ「こういう情報が不足していただ
ろう」という指摘は少ないです。少ないと
言うか、ほぼないです。極端に通訳ができ
ていなかったとか、そういう指摘はもちろ
んあるんですけど、そうした微妙なニュア
ンスに関しては当事者からは特にはないです。
「ない」と言い切ってしまったら変ですけ
ど。

前田：だから、たぶん「足りてない」とい
うこと自体がわからないのかな？でも、そ
の通訳が十分にできているのか、上手くい
っていないのかを気付ける人っているのかな。
居るとしたら、通訳者だけ？でもそれって、
外国語の通訳には良くあることだよ。

飯塚：あるかも知れないですね。

前田：じゃあ逆に、その聴覚障害者の通訳に
独特の部分ってのがわかりにくいかなあ。

飯塚：「気付きにくい」という部分が、たぶ
ん大きくて、はい。外国語だったら音とし
て外国語のやりとりをしているのである程
度、量もわかるし、その部分で翻訳された
部分もある程度わかる。

司会：では、テイカーの方が、そこまで反省
モードになってしまうのはなぜですか。

飯塚：反省モードになる理由としては、やっ
ぱりお互い比較ができる部分があるからで

す。彼らの周りでなされる会話と、自分が通訳した内容はわかっているの、そこでの情報の「差」を通訳者はすごくわかる。把握はできているという面で、すごく反省モードになるかなあ。

伊藤：「どうしようもないじゃん」というふうには、ならない。

飯塚：テイカーのなかでですか。あるとこはあると思います。

司会：関連して、「ま、いっか」の話が前田さんの本の中にもありましたよね⁴。介助者と利用者のあいだで「ま、いっか」と思える部分が、どのようにして生きられているのか。介助者どうしででき上がってくるのか。それとも当事者が介助している方との関わりのなかで「ま、いっか」と思えるラインができ上がってくるのか。

前田：介助者間、介助者どうしはあんまり関係ないんじゃないかな。自分のなかのこだわりの話やと思う。だって自分が気持ち悪いと思うかどうかって話でしょ。だから、ちょっとずつ、まあええかっていうふうに言えるようになっていくっていう変化、それは別に介助者どうしの関係性がどうのこうのってことではない。

○ ひきこもりの当事者支援を調査する——何者として？

司会：次は伊藤さんからお願いします。

伊藤：いつもはひきこもりの当事者というか経験した人が自助グループ、毎週とか、月に2回ぐらい、そこにフィールドワークしながら当事者同士が集まってやっていることが何なのかを見ている最中です。だから

見ているのが介助者と利用者ではなくて、どちらかと言うと当事者同士でやっているところなんで、前田さんと飯塚君のフィールドと、違った支援観があります。たぶんひきこもりの現場になると、青少年をどういうふうに教育するかとか、それが就職だったり、医療に繋げてださせたりということであったとしても、どういうふうに自立させるかっていうことが焦点にあるから。2人の話を聞いて、やっぱり支援のずれが、あるなあっていう。この人たちを、どうすれば1人前にできるのかっていうのがあって。でも、そういうのにどこか乗れない人が自助グループに来たりして、ちょっとあれ（一般的なひきこもり支援）どうなんかなっていうことを（自助グループでは）言ったりしてて。

司会：伊藤さんのことを「当事者」といってよいですか。

伊藤：（ひきこもりを）経験してた。

司会：卒業論文を「自分史」を通じて書かれて、その後、当事者による支援のフィールドワークを行われていますよね。先のお二人とは現場がかなり違うので一概に比較することはできませんが、当事者として支援を受ける側の立場を、現場で今、どう考えられていますか。あるいは、障害者の現場と健常者の日常を切り離す考え方が前田本のなかでは介助者のリアリティを通じて、むしろ批判的に問われていると思うのですが、「当事者」という立場からは、現場と日常の関係ってどういうふうに見えるものでしょうか。

伊藤：日常が何かって、ちょっと良くわからないんですけど。何ていうのかな、本当は、いや本当はって言うのとあれだから、何か地

⁴ 「ま、いっか、のココロ」(前田 2009:266-70)

続きってというのが、皆、言っていることで、そうなんだろうけど。

前田：その切り分け方で論じるのは、ちょっと無理があるかも知れない。あんまり上手くいかなさそう。

伊藤：日常って言ってもたぶんちょっとね。

前田：「先輩」として関わってるの？メンターと言うか。

伊藤：そう、メンターになったり、メンターに、(自分だけでは無くむしろ)向こうがメンターになったり。変わる、くるくる変わるんで。何だろう、でも何というか自助グループって、別に治そうとしている人も当然来るんだけど、全体として何かになるっていうわけでもないから。たぶん、何ていうのかな。

前田：かれらはそこに何をしに来るの。

伊藤：たぶん居場所とか話をしたい、あるいは話を聞きたい。ひきこもっていた経験があったり、ひきこもりから「出た」けど、支援とかトレーニングばかりで、それで職に就けたら良いのかも知れないけど、それだけじゃあ、個人的には腑に落ちない所があつて。他にこういう同じような経験した人は、どういうふうな「処理」をしているのかなとか、あるいは自分自身を上手く表現する場面がないから、ここなら話を聞いて貰えるんじゃないかっていうことで、来ています。普段の生活における閉塞感をどう処理していくのかっていうところで流れ着いているという感じです。「出た」としても、やっぱり働くことに関しては、どうしても即物的なやり方で「治りましたよ」というのでは回収されないものがある。あるっていうか、あるんでしょうね。僕もあるかもしれないし。でもやっぱり、それぞ

れの経験が少しずれるから、トラブルになったりもすることありますね。トラブルって言うとか情緒的だけど、喧嘩っていうほどにはいかないだろうけど、気まずくなったり。

司会：メンターになるか、ならないかという部分で、伊藤さんが直接メンターになる時って、どういった体験でしたか。

伊藤：たぶんメンターになりたくてなっている感じじゃないような気もするんですけど。勝手にその場の状況で、何かこの人に与えているなっていう瞬間があったりはする。でも、これたぶん僕の個人的なことだけれども、僕自身はあまり頼られる方じゃないから、頼られても上手く対処できる人じゃないから。でもたぶん、良くわからないけどできなくても大丈夫なんだっていうことは、そこで示しているのかなあ。良くわからないですね。でも、それで納得しない人は当然居るから。この人はこんなもんなんだっていう。

司会：聞いていて思ったのは、前田さんもそうですけど、飯塚さんのフィールドも、やはり他者になることの困難というか、他者との距離感がまずある。その上で飯塚さんの場合であれば、テイカーの「耳になる」ことをめぐる問題として、前田さんのお話であれば、介助者のリアリティをめぐって、本当に些細な場面が豊富にかつ丁寧に描かれていますよね。それが伊藤さんの現場のように、時にはメンターになったり、ならなかったりするといった場合は、当事者と支援者の境界が変更可能というか。その部分に違いがあるのではないかと思いつながら聞いていたんですが、いかがでしょう。

伊藤：でも、当事者っていう言葉はたぶん、

そういう言葉で繋がっているんだろうけど。僕自身の話をすると、当事者として現場に入っていったけれども、だんだん当事者でなくなっていくっていうか。入っている目的が、その研究のためっていうのが半分以上の割合であるし、確かに入っていて色々なことを一緒にやっているけれども、たぶんこれ僕がそういうふうに入っているからってうだけじゃなくて、その場に居る人自体が、たぶんそれぞれの思惑で入っているから、どうしても、一方でその場に入っているけれども、完全に切り切れてない感じが、やっぱりありますよね。どうしても、それは当たり前の話になっちゃうんで。でも逆に、そもそも完全になり切れるものでもないっていう。だから、別にその当事者とか支援者とかって言うくくりだけじゃなくて、やっぱり当事者同士でも「温度差」とかあるし、利害とかもあるし。それは微妙なところで。たぶんそういう微妙な違いがあるから、メンターとか、お互いの役割がそのなかで決まっていって、というのが。たぶん自助グループっていうのは、違っているから続いているというのが当然ある。

前田：自立生活運動の文脈で言ったら、ピアカウンセリング⁵に近いのかな。もちろん自分は、障害者にとっての「ピア」じゃないので、参与観察という意味では全くノータッチなんだけど。

伊藤：ピアじゃない。たぶん、ピアって言っても、本当はピアじゃあないんですよ。実際の自立生活、わかんないですけど。少な

くとも原理的には、その完全にピアになって無理だし。

司会：それは、例えば学歴や年齢といった属性の部分に由来するものとして理解して良いですか。

伊藤：いや、でもそれだけじゃあないでしょう。これまでどういう、その人がどういう経験踏んで来たとか、どういう環境のなかで生活しているのかというのが、たぶん出て来て。別に学歴とか年齢、ちょっと年齢になると少し経験の蓄積がそのまま反映されたりするから、その場で何が必要となっていて、その瞬間において何が、どういう情報が必要であるとか。エモーショナルなものだったり、あるいは、より社会的なものかもしれないけど、何が必要かっていうことに応じて、どういう人がメンターになるかっていうのは、割り当てようになっているかな。そこまでメカニズムがきっちり決まっているかどうか、ちょっとまだわかんないですけど。だから、属性っていうより、もうちょっと、より生活のレベルに落とし込んで、何をやっているのかとか、何ができるのかとか、そういうところで決まってくるんじゃないですかね。でもやっぱり自活している人はあんまり居ないかなあ。だから、どうやって就職活動するのかとか。

前田：「サクセスストーリーが聞きたくて来ているわけじゃない」と。

○ 支援現場における「普通」と「サクセス」

伊藤：サクセス。逆に、そういう人も居るかもしれないけど、そのストーリーを聞くと、むしろふさぎ込む、嫌な感じをする人も居るし。たぶん、もうちょっと何か別の話が

⁵ 一般的には「障害者同士が、日々の困難や過去のつらい経験などを語り合い、サポートしあう」こととされる（前田 2009：28）。

聞きたい。別の話って、たぶんサクセスストーリーとかって、その支援の文脈で言えば、こうすれば良くなるみたいなかたちで流通しているから、自助グループに来る人で、あんまりそういうのは聞かない。

前田：サクセスストーリーというか、何やら、「普通の暮らしができていいる」みたいな意味での「サクセス」があるやんか。障害者どうしのそういう、一番わかりやすいところと言ったら、「結婚できている障害者」とか。男性、特に健常者の女性と結婚できている男性障害者とかは、やっぱり、「サクセスストーリー」では、ちょっと言葉強すぎるけど、そういう「普通」が達成できているというのには、すごい憧れが強いんじゃないかな。もちろんそれに対して、ロマンティック・ラブ・イデオロギーだっていう批判はできるんだろうけど、やっぱり強い、そういう価値観って。そういうモデルストーリーみたいなのは、やっぱりひきこもりの現場でも強い？ そうでもない。

伊藤：いや、強いですよ、たぶん。

前田：わかりやすい「サクセスストーリー」ってことで言えば、例えばその「ひきこもりだったけど会社を作りました」とか。そういう人もいてるやん、実際。

伊藤：いますね。

前田：会社に就職するとかそういうことができないから、その代わりに自分で事業を立ち上げて、今こんなふうに活躍してますみたいなパターンって良くあるやん。それはサクセスストーリーとしてわかりやすいけど、そこまでいかなくても、もっとこう、ごくごく「普通」の。結婚して子どもが居てみたい。それに抗うのって、結構難しい。そういう「普通」の幸せってあるけども、

「そうじゃないんだ」って言うていくのは大変やし、なかなか伝われへん。

伊藤：たぶん「普通」との距離感がそんなに遠くないっていうか、ひきこもりはたぶん、薬やれば治るんでしょとか、働けば表面上は治ったように見えるとか、そういう感覚になっちゃう部分があるから。やっぱり「普通」への憧れっていうのは、結構強い印象はあります。印象っていうか、たぶん強いはず。むしろ強いからできないとか、そういうふうには振る舞えないっていうのが、より意識に。当事者にとって、「普通」への憧れに) 焦点が当たってくるっていうのがあるから。

司会：飯塚さんのフィールドで、「普通」であることや「サクセス」をめぐる逸話がありますか。

飯塚：通訳を付けて社会参加するっていうのが、フィールド（R 会）としては目指しているところなんですけど、そういうモデルがないっていうのも結構、言われているところで。実際に通訳を付けて社会参加している聴覚障害者はなかなか居ないし。例えば、身体障害の自己決定とかは1人暮らしをするという点に結構、価値を置いていると思うんですけど、聴覚障害者は何をしたら社会参加できているのかという部分が、ちょっと曖昧な状況です。

前田：ちょっと外に出る時に、ちょっと困ることがあるから、そうやって通訳あれば良いなあぐらいはあるかもしれないけど、ろう者のコミュニティのなかでずっと暮らしたいこうと思ったら、できるわけやもんね。

飯塚：ろう者として生きる人もいます。デフコミュニティにずっといて、そこで暮らしている人たちもいるんですけど、自分

のフィールド(R会)はどっちかという、デフコミュニティに馴染めないというか、一般的な教育を受けたりとかして、手話も、日本手話⁶を使わない人たちなので、日本語をベースにしている人たちです。難聴者とか中途失聴というくり方がわかり易いと思うんですけど、そういう人たちなので。そのデフコミュニティに参加もできないし、ちょっと宙ぶらりんな状態である人たちです、そのなかでのモデルがないというか、ない。

司会：「普通」であること。それは「ノーマライゼーション」と言われることもあるかもしれないし、ひきこもりのフィールドであれば就労や結婚といったいわゆる「普通のライフコース」が、想定される場合もあると思います。そこに「介助する」って結局、何なんですかね。あるいは「支援する」ことは、「普通になること」を助けることなのでしょうか。あるいは明確なモデルが見えないような状況の現場で支援することは、いったい何に向けて行っているのかというか。どう考えたら良いのでしょうか。

前田：日常的にそんなこと考えながらやってなかったしなあ。

司会：支援のパターナリズムの問題とでも言い換えられるかもしれませんが。

⁶ 日本手話とは独自の文法構造を持った自然言語であるという考え方にに基づき、名づけられた手話のこと。音声日本語に基づくものとしての「手指日本語」、「日本語対応手話」、「シムコム」などと区別される。詳しくは木村晴美・市田泰弘 1996「ろう文化宣言——言語的少数者としてのろう者」『現代思想臨時増刊号』24(5):8-17、上農正剛 2003『たったひとりのクレオール——聴覚障害児教育における言語論と障害認識』ポット出版、等を参考。

前田：それはまあ、やりたいと思っていることを邪魔しない程度に、何とかやっていくということをやって、ああ、なかなか上手いこといけへんなあ、どうやったらええかなあみたいな感じのことを考えているだけであって、別に何か障害者のかい理想に向かってとかやってたわけじゃないし。

○ 調査を通じて変容する「私」

前田：良く言ってきたことやけど、自分の身体使った「実験」みたいな感じで、何か変なとこっていうか、馴染みのない世界に入ってしまった時に、自分がどんな反応すんのかっていうのを、自分で見ているんだと。それまでのアイデンティティとかそれが、どうやって崩れて再構築されていくかみたいな話。

司会：すこし脱線しますが、この本以降の「その後」の再構築や関わりは、どのような感じなんですか。

前田：戻って行く、行っているんちゃうかなあ。「健常者」に。

飯塚：自分は普段関わる介助という立場よりも、普段その人たちと接する中でなんですけど、初めは障害者、コミュニケーションが取れない状態だったんですけど、だんだん慣れてくると、だんだん障害者じゃなくなってくるというか。その人のコミュニケーション方法がわかってきてしまうと、だんだんコミュニケーションの困難さがなくなってきた。拭い切れない部分はあるんですけど、どうしてもわからないとこはあるんですけど、でも、だんだんそういうのが軽減されていくっていう過程があります。だんだん障害が「薄く」なっていったかな。

司会：当事者の身体的な難しさとしての「障害」はあり続けているけれども、むしろ飯塚さんのなかで、当事者への「障害観」が変化したということですよ。

飯塚：はい、そうです。

司会：そのお話は前田さんの本で言う「慣れ」の過程とも通じる話かなと思います⁷。さっきの話に戻すと、前田さんはその自分の身体を観察しながら考えるという部分は、本にもはっきり書かれていますよね。今まで特段、「障害」というものと向き合ったこともない自分が、働きながら調べて変わっていくプロセス。ただ、その過程と伊藤さんのように当事者的なスタンスで研究していく中で「変化」の違いは、どう考えればよいですか。前田さんや飯塚さんのような変化もあり得るけど、伊藤さんのように、当事者的な研究のスタンスも一方で持っている方からしたら、そうしたプロセスはどう考えられますか。ご自分の自分史という面から見ると。

伊藤：たぶん意識してそのやりたい方向に持っていけないとか。やりたい方向に持っていけないのは、それはそうなんだけど、何ていうのかなあ。だんだん当事者でなくなって、ひきこもりじゃないとなっちゃうから、だんだんそうじゃなくなっていくっていうのもあるし。

司会：それが当事者研究をしながらの変化っていうことですか。

伊藤：何かたぶん変化している、そう、しているんでしょうけど。たぶん変化の仕方がちょっと、僕の場合は、現場であり、競争原理を相対化して考えることを、一方で言っているにも関わらず、自分はそうい

う、むしろ競争の側に居るっていう矛盾が、どうしても出てくるから、しんどいっちゃあしんどいですけど。その矛盾した所に居るっていうのが。わかりますか、だから、どうしてもやっぱり競争社会のなかにもどうしても組み込まれちゃったっていう感覚があるから。大学院入って、だんだんそうなりますからね。院生だって。いや、そういうふうにはやらない人も当然居るんですけど。だけど、自分はそうなれないから。たぶん自分は現場に入っている感覚がある一方で、あんまりそういう（競争原理的な）ところには入らない、やらない方が良くないかあないかっていうことを、どうしても言わざるを得ない状況がありますよね、正直、現場行くと。

前田：言行一致ってこと？

伊藤：言行一致が図れない、できないっていう。結構これ、誰か問題にしていたんですかね。「あんたアカデミズムに染まっているんじゃないか」って。

司会：そういう風に言われたのですか。

伊藤：直接は言われてないかもしれないですけど。でも、結構そう。ただ、アカデミズムの部分をもう少し組み替えても通じると思うんですけど、その、「あんた会社に染まっているやん」とか。だからその実際に生活していくフェーズと、でも、それでもあえて言わないといけない部分が分離しているっていう感じで。足下の生活ではどうしても稼がないといけない部分がある。一方で、でも、実際にやっている生活を少し相対化して見る部分も必要で、そこはどうしてもね。これは結構、不登校とかひきこもりの文脈で言われたりするんですけどね⁸。

⁷ 『「慣れ」への道』（前田 2009：243-76）

⁸ 例えば、貴戸理恵・常野雄次郎, 2012, 『増々

前田：別に良いんじゃない。だって、われわれの周りでも、「介助者が自立できてないじゃないか」とかいう話、よくあるもん。この場合は「経済的に自立する」って意味だけど。

伊藤：だから逆に、自立って何かっていうことを考えることにもなるんですけど。

司会：先ほどの「普通の話」あるいは、「何がサクセスか」問題ともかかわる話ですね。

○ 「出入り」問題——支援と自立のあいだで

前田：だから、「実家に住んでいる介助者なんて」っていう。X 会自身も、現在は割と問題にしようとしていて、でも、「介助者の自立」を達成するためには介助者の給料がまともじゃないとダメでしょう？だから障害者が暮らすための支援も必要やけど、介助者が自立するためにまともな給料を、介助者に払えるような体制を作らないと。労働者として介助者をまとも扱っていくっていうことも、もう 1 つの運動っていう部分として重要にはなってる。

司会：前田さんの本の場合だと、介助者が社会に偏在していくという、ある意味で「出口」にあたる、次のステップが置かれていますよね⁹。でも一方で、現場に残り続けて、支援を引き受けざるを得ず苦悶し続けなきゃいけない問題もあると思います。本でも議論になっていましたが、どういった支援の現場にもそうした人の「出入り」をめぐるって、残る人、残らない人が出ると思うの

ですが、これをどう考えたら良いですか。飯塚さんの現場のテイクナーたちも、出入りは結構あるものですか。

飯塚：そうですね、テイクナーはかなり出入りが多いですけど。何を支え続けるっていうのが、ちょっと曖昧で。どっちかというところ、やっぱりモデルがないって先ほども話したように、当事者の人たちもやっぱり社会参加どんな感じなのか、わかんないっていう所がちょっとある。どういうふうに通訳を使う、通訳は使うのは良いんですけど、どういうふうに使って、どういうふうな形が理想なのかとか、普通なのかとか、そういうのが結構、曖昧になっていて。自分から見た観点なのですが、あまり運動は続いていなくて、通訳者もどう携わって良いかがちょっとわからないし、24時間介助とかそういう感覚でもなく、単に、行きたいところにちょっと付いて来てもらって、5分10分通訳するみたいな。かなりバイト感覚に近いというか、そういう面もあると思っています。だから、テイクナーとして携わって居続けるっていうのも、まだ歴史は浅いですし、今のところそういう感覚は自分が見る限りではないですね、はい。

司会：辞めていく人はいないですか。

飯塚：ほとんどがもう辞めています。活動はちょっと抑え目に。「冬眠中」と言ったら良いですか、そういう感じです。

司会：それはいわゆる、支援の「ニーズ」が達成されたからと理解してよいですか。

飯塚：そうですね。そのニーズがそもそも、あるのかないのかっていうところがちょっと微妙です。普段のコミュニケーションだったら、相手はもうコミュニケーションの取り方を知っているし、結構、仲の良い人

補 不登校、選んだわけじゃないんだぜ！(よりみちパン!セ)』イースト・プレス、を参考。

⁹ 「遍在する『介助』」(前田 2009 : 332-5)

たちとのやりとりが多いんですよね。仲間連れで行ったりとか、そういう人たちってやっぱり、そういうコミュニケーションに障害はあまりなくて、相手もコミュニケーションの取り方を知っていたりとか、そんなので「通訳は必要ない」っていうふうに言う人たちも居るし、当事者のなかでも通訳を使う機会っていうのが、なかなか見つけられない、そういう状況があります。「ニーズが、そこにはない」と言ってしまうのは、ちょっと難しいとこなんですけど。そういう状況です。

司会：伊藤さんのところにも「出入り問題」はありますか。

伊藤：僕、あんまり出て行くっていう感覚でもないし、何というのかな。でも、たぶん一般的には、居場所に留まり続けている人が当事者とか経験者が多いっていうのが、問題になったりもするんです。つまり、居場所から外には出られなくなるとか、そういう感じで。確かにそういう部分もあるんですよね。

司会：別のところで聞いた話ですが、高齢者とまではいかなくとも、壮年層になってきている「ひきこもり」の方もいるのですか。

伊藤：居ますよ、40代50代、普通に。でも卒業っていうより、ひきこもりっていう文脈から外にはちょっと。(居場所自体は)続いても、そこから先の道が見えにくいていうのはありますね。だから、実際その支援の場に来ない、来なくなるっていうのは、どちらかと言うと、もう就職しちゃう人も、就職して忙しくなって来られないっていう人も居るんだけど、その一方で、また調子悪くなって来られなくなったっていう人も居る。その中で支援者もやっぱり、燃え尽

きたりするんですよね。ひきこもりの支援機関にいる人たちも。

前田：その出入り問題で言うと、もちろん大学生とかで介助やっている子も多いんだけど、フリーターみたいな感じで介助やっている人とかも多いわけ。半々っていうか、そっちの方が多かな。そうすると、その介助者の自立みたいな話もあるんやけど、やっぱりね、結婚する時に辞めてしまう人が多い。

司会：ちょっと意外な感じがしますけど。

前田：もちろん介助者同士で結婚してるとかもあんねんけど、結婚を機に、その要するに、バイトをずっとしてたから、「ちゃんと就職しなあかん」っていうので介助を辞めちゃう人が結構多い。これは結構ね、重要やと思う。それで思い出したけど、自分が結婚する時、ずっと介助に入ってる人に、「俺、もうすぐ結婚することになりまして」みたいな話をしたわけ、世間話として普通に。

司会：それは、「おめでとうございます」ってなりますね。

前田：そうすると、顔色がさっと変わって。それなんでかって言ったら、その話を始めた時に、俺が辞めるっていう話を切り出したと思ったみたいで。俺は最初意味がわかれへんくって、「ほんまおめでとう」みたいになるんかと予想してたのに、めっちゃテンション下がって。「結婚することになりまして」言うたら、「え、ああ、ほんま」みたいなリアクションなわけよ。それがなんでかよくわからなくて。それで「介助辞めんの？」みたいな雰囲気、話になって、「いや、ちゃうちゃう、そういうことじゃないよ」ってことになってようやくはじめて「な

んや、そういうことやったんか」って。でも、それぐらい多いってこと。「寿退社か」、みたい。ほとんどがそういったかたちでの「出入り」。「自立するために介助を辞める」っていう。

司会：何か、皮肉ですね。

前田：皮肉な、今でも本当にそうやで。介助で喰えないから。X 会は、だいぶまともやけど、めちゃくちゃまともやけど。

司会：業界でそうした出入りがあるということなんですね。

前田：業界的には良くあることやと。あと、その出入りは、自分の本の中身ということと言ったら、基本的には自分が辞めることの「言い訳」を書いているところもあったかもしれない。結局はね。そのうち辞めるとつもりで書いているわけやし。辞めるといふか続けられへんやろなつてのはわかってた。それをどう「言い訳」するかって部分はあんねん、もちろんあんねんけど、基本的には辞めようと思えば辞められるつていう運動の方が、人は入って来るといふスタンスなん、俺は。

司会：それは書かれていましたね¹⁰。

前田：だから、「それ辞めれるよ」つていうことを言っていた方が、実は運動にとっては良いんじゃないかって。辞めても、そのやっていた期間で勉強になることはあるし、プラスになることはあるから、やれば良いと思うしとか。バイトとしてやって楽しいからとか、友達できるからとかで全然構わない。でもそれは、運動の、ガチでやる人からしたら、あんまりその、良い意見ではない。たぶんこれ、障害者運動をやっ

てる人が見たら、「何言つてんの」つて、「学者が勝手なこと言うとなあ」つていうふうに読む人も居るだろうし、意図がうまく伝わるかどうかは微妙だけど。

司会：でも実際、現場も含めて、そうしたレスポンスはあったんですか。

前田：いや、でも「CIL¹¹の話やなあ」みたいなことはよく言われるかな。「CILらしい」ドライな、どっちかって言うと「運動運動」してない。

司会：その部分が、本でも書かれているみたいに、お金が介在することで、ある程度は割り切れる部分ができるよ。

前田：そう。アメリカ型というか消費者主権みたいな立場で、障害者を見ていくという立場、ドライな形のね。日本の障害者運動つて言ってもいろんなルーツとか文脈があるから。

司会：その出入り問題つていうのが、「普通」を達成していける層と、そうじゃない層との対立を孕みつつも、一方でそのことが運動自体を広げていく可能性もあるとすれば、運動や支援の現場にとっても「プラス」になる部分もある。その両義性ですよ。介助の両義性という話で、ご本で触れられている内容とも関係すると思います¹²。著書の刊行から5年経っていますけど、結構、この問題の「壁」は高いと思うんです。前田さんご自身は、この壁をどう乗り越えるんですか。結構高いと思うんですけど。

¹⁰ 「出入りする／〈介助者〉になる」(前田 2009 : 277-323)

¹¹ CIL とは、Center for Independent Living の略称で、自立生活センターと訳される。詳細は「CIL という場所」(前田 2009 : 27-37) や、コミュニティとしての CIL の位置づけをめぐる議論を参照(前田 2009 : 284-323)。

¹² 「介助の両義性を位置づける」(前田 2009 : 325-32)

前田：青春の1ページ（笑）

司会：あれ、めくられちゃった。じゃあ、今は何ページ目なんですか？っていうね。

○ ニーズを掘り起こす事の困難——「メニュー表」のアナロジー

前田：ほかにどんな論点があったっけ。ニーズの掘り起こしの話があったよね。支援の必要性がまだ気づかれてないわけでしょ。

飯塚：はい、そうです。でも、たぶん車椅子の、身体障害者の運動って、そういう経緯ですかね。

前田：あったあった、あったと思う。

飯塚：そういうふうに重ねていったら、勝手だよって捉える人もいたりとか。

前田：そう、「ここまで求めてもいいんだ」というのがわかれへんから、あるいは、その発想自体がないわけでしょう。周りの物音とか周りの人たちがどんなふうなこと喋っているか、みたいなことを、聞こえる人たちは、それを聞いてるんやっていうことをきくと知らんわけやから。じゃあそういうニーズを誰が、広げていくのか。例えて言うと、お店でなにか注文するための「メニュー」があるとするやん。ほんなら、今のところ品数が5個ぐらいしかないわけ。こんななかから選べっていう状態やね。例えば今の、まだニーズがわかってないっていうことやけど、ほんまは、こんなシンプルなメニューじゃなくって、もっとでっかいメニュー表があって、ここにもめっちゃ注文してもええこと一杯あんねんでっていう状態なわけやんか、ね。でも、ほとんどの人らは、ここの手元の小っちゃいメニュー表しか見えてないっていう状態やん。もっと

でかいメニュー表ありまっせっていうのを、伝えるということが必要なんだと思う。でもそれを、誰がやるの？

飯塚：先天的に聞こえない人とか。例えばろう者とかが言われる人たちは、ないことはないって言ったら変ですけど、ここ（音が無い世界）のメニューが当たり前やし、別のメニューがあったりとかするので、それで満足している。満足しているって変ですけど、その通訳を付けて社会参加をするっていう所の過程とは、ちょっと路線が違うんです。難聴者とか中途失聴とか、ある程度、情報を知っていたとか、そういう人たちにとってメニューの差っていうのが、すごく自分のなかで突き付けられる問題で。例えばそのCILの代表者も、難聴者であったりとか。実際に、それを当事者に伝えていくって言った時に、ろう者に伝えようとしても、やっぱり共感できない大きな溝があって、難聴者とろう者の間に。情報の価値付けも違うし、社会参加の仕方も違うだろうし、そういう所で今、行き詰っています。難聴者は結構、前の身体障害者でも近いかもしれないですけど、自分を障害者として大っぴらにしたりとか、そういう運動っていうのは、ちょっとまた違うし、通訳を付けることに関して、結構、危機感を持っている人も多くて、という段階です。

前田：イメージできへんなー、実際に。それを使ってどんな生活をするかっていうのもあるし。

飯塚：そうですね。

前田：だから、前提にどういう暮らしがしたいのかっていうのが、あるわけじゃあないし、普通はないわね。だってそんなの、健常者でもないもん。介助使って暮らしてい

くなかで、ちょっとずつ範囲が広がってきて、「こんな生活」ってのができてくるわけやから、先に理想の生活があるわけじゃない。これもちょっと文脈、ちょっと話違うかも知れんけど、自立生活を始めた障害者で、介助を使って自立生活を始めたは良いけど、「じゃあ毎日、何してんの」っていう話。行き詰るといふか、自立生活する前とかは、そのやりはじめたきっかけみたいなんは、例えば毎日好きな所に行って、好きな暮らしをしたいと。いつでも好きなときに介助者どこか出掛けて行って、何かして遊びたいみたいな話もあるわけなんで、それはすごい切実なニーズ、ニーズっていうのもあれやけど、切実な思いやから、それをどうやって実現していくかっていうことに色々あるわけやね。それでやっとな施設とか実家とかを出て、自立生活始めんねんけど、その「暮らす」っていうことは達成できたけど、「じゃあそっから何すんの」って言われたら、「じゃあカラオケ行ってみたい」とか、「介助者を連れて、見たい映画、三宮とか大阪とかに出て映画を観に行きたい」と。それはできるわな。で、なんなの、という話。USJ 行きました、楽しかったです。別にそれで仕事があるわけじゃなし、重度やったら生活保護と年金で自立生活、やろうと思ったらできるわけやんか。ほんなら、自立できました、一人暮らしできていますねって、でもそれでいいの？という話で、運動の人たちがイライラしていたり。できてしまうから、そこまでは。その先、自立した、自立生活始めたうえで、じゃあ何をするかって言ったら、別にやることないやん。事務所にも全然、出てけえへんし。運動、要するに運動にコミットしないって

いうのでイライラしている人も多いわけやけど。何か満足してしまう。

司会：サクセスストーリーの「平凡さ」ですか。

前田：ちょっと違う。そうじゃなくって、何やろな、何か要するに暇そうやと。自立生活できた所で。そんなんでもったいなあと思うところもあるし、一方で、「まあ放つといたらええやん」とも思うし。難しいとこ。

司会：「暇」ができるということ自体が、「何かを達成している」っていうことでもあるのでは。

前田：多少はそう。

飯塚：前田さんの話を聞いて、自分と通ずるなあと思ったのが、健常者たちのやっている生活っていうのに、近付けていくっていうの、たぶん自立生活運動であると思うんですけど、それが限りなく近付いた時に、その後、何をするかっていう所にやっぱり課題があるという。課題って言ったら変ですけど、何をするかっていうところに疑問符があるっていうのは、確かにそうだなあと思っていて。聴覚の場合も、この通訳を付けて一般の会話に参加していくってところが目標としたとしても、会話に入って何を話すかとか、何を心得て何に活かすかっていうのは、やっぱり不透明で。そういう所を伝えていくっていうのは、ものすごく難しいし。

司会：なかなか言語化しにくい領域ですよ。

飯塚：はい、そうです。そういうところでも。

○ 問題をひらいていくときの「危うさ」？

司会：ちょっと違うかもしれませんが、これ

って「逆」のプロセスなんじゃないかって思ったのは、いわゆる、「老い」のプロセスのなかで、人は「できていた」ことが「できなく」なっていくますよね。その「差」をケアや支援によって埋めるのかは、いろいろなケースがあるとはいえ、さきほどの中途失聴のお話とも、もしかしたら繋がるかもと思いつつながら、そうした他の問題とのつながりを考えていました。これは前田さんにもお伺いできるポイントかと思ったのですが、具体的には「フラッシュバック！」の箇所で、別のことをしていても、「あ、これって、ケアに近いんじゃないか」とか。棒高跳びの選手が信号機見たら跳びたくなることがあるとかないか¹³。要は、全然違う現場なのだけれども、日常的な営みを別の場面にも見出すことにもどこかつながるのかなあと。もちろん身体障害や聴覚障害の問題と、いわゆる一般の老いのお話を同一視することはできないですが、当の問題を媒介しつつ別のところでも問題を見出していくような。あるいは、問題を切り分けないうで、あえて繋ぎながら考えていくやり方についてはどう思われますか。

前田：何か、いや、その語り口は結構怪しくて。なんでかって言うとね、障害者問題っていうのを自分の問題として考えなさいという時に、「誰でも障害者になる可能性はあるんですよ」みたいな語り口あるやん。それにちょっと近付くで。だいぶ危うい、それ。

司会：当然そこで「勘違い」したらダメだと思います¹⁴。際どいってことですか。

前田：いや、それはだから事実あんねんよ。

それは歳取ったら障害者になるねん、みんな。それはそうやし、授業でも言うことやけど、今、ちょっと帰りに車に轢かれて、事故って障害者になることも普通にあるよ。でも、じゃあ、「だから君たちの問題でもあるんだよ」っていうのは、ちょっと違うと思う。そこを共感のポイントというか、共感はあるかな、理解のポイントとか結節点みたいにしてしまうと、ちょっと。

司会：その場合は確かに危ういと思います。

前田：別に関係ないというか、自分がそうなる可能性なんてなくっても、理解できないとかかんところが。だから別に自分が、そのうち障害者になるっていうことじゃあなくとも、全くの他者として別に考えられることであって、考えることはいくらでもあるわけで。

飯塚：確かにですね。

前田：想像して貰うみたいなところを踏み台にして、話をしようとする、ちょっと。

司会：確かに、そこ私も考えたいところで、それを単なる空想上の話としてしまうのか、具体的な出来事があって、それに基づいて解釈していると捉えるのとは、だいぶ違うと思っていて。当然、全く関わりがなくとも関われるやり方っていうのが、あることはわかりつつも、それだけではないもう1つの方法というか、別の問題にも繋げていくやり方が、問題が開かれる時のポイントかなと思うんですよ。往々にして、オーバーラップしてしまう問題っていうのも、

一と『傷つきやすさ』の社会学

『SYNODOS』<http://synodos.jp/society/5846> (2014年2月26日閲覧)における「勘違いの共感と反動としての反感」をめぐる議論がある。

¹³ 「フラッシュバック！」(前田 2009:88-91)

¹⁴ このとき司会者の念頭にあったテキストとして、例えば、塩原良和 2013「ヘイトスピ

あるじゃないですか。当たり前ですが、障害を持っている方が老いていくというプロセスも当然あるでしょうし、問題は複合的に起こっている。

前田：そやけど、どの水準で、その「横」に繋ぐかっていう話でしょ。それが、その設定が、だから良くわからへん。

司会：そうそう。だからこそ、元介助者たちの「その後」を考えていくと、今日の話にも出た「出入り」の両義性については、拡がりど可能性のあるのではないかと思っています。この本を出された後にも、かれらの追跡調査をされたりしているのですか。

前田：いや、でもずっと介助やっている人の話を、ちゃんと聞いとかなんかというの、あるかなあ。でも、どんなふうに、それが変わっていくプロセスとして、あなた自身は変わっていきまいたかみたいなことは、聞き取るのはなかなか難しい部分もあるし。どうしたらいいのかなあ。そういう仕事を始めていくのに、ライフヒストリーを聞いていって、こっちで解釈していくとか、拾っていくしかないんだろうね。

○ 結局、どう書けばいいのか……

伊藤：飯塚君とも打ち合わせで、自分のことを観察しながら、自分のことを書くことの難しさはあるなと話していたんです。前田さんのなかでは結構、どういうふうに自分を見てるんかなっていう。

前田：俺、ナルシストやから（笑）自分が大好きっていうのは、良く言われる。

司会：でも、格好悪い部分も含めて書ける「ナルシスト」って、きっとレベル高いですね。

前田：それは、だから、こんなふうに見せた

らおもろいんやろうなっていうことばかり考えて、生きて来た人間やから（笑）自分の見え方をずっとこう意識しながら、常に振る舞うようなタイプ人間やからというのも、元々ある。

司会：それこそ、ご自身を「見られている」

証拠ではないですか。民族誌は、他者を描くことの暴力性を孕んできたからこそ、著者自身が見えていない部分として、他者からみた「私」をいかに考えるか、というのが、フィールドワークといわゆる「自己反省性」をめぐる昨今の議論の前提にもなっているわけで。だから、その部分をどう考えるのかも、この話に臨んでいる我々だけではなく、フィールドワークする人にとっての他者を考える上での自己をめぐる問題として、きっと残り続けると思うんです。

前田さんは、ご自分なりの書き方を見つけていく時のポイントって何かありましたか。

前田：こんな書き方はしたくないっていうのは一杯ある。あったかな。「社会福祉学」がわかりやすい仮想敵としてあるから、何か暗い話として書かないとか、笑かしたいみたいなのがあるやんか。変な書き方をできればしたいとか、「遠い所」から書き始めたとか、そういうのは常にあった。

司会：その「遠い所」っていうのが難しいと思うんですよ。対象や現場にかなり近づいていながらも、自らを（認識の上で）遠くに置くことは、言うは簡単だけど、やるのは難しい、ですよ。

前田：自分がいる地点のことを、こんな場所なんですよっていうことを、読者に語って聞かせようとしているわけでしょ。論文書いたり、本を書いたりするって。でもいきなり、伝えようとしてもわかりにくいから、

この辺のことから話し始めると、割とこう、伝わりやすくなるんじゃないかな、とか考えて書くことが多い。

司会：より読者側に近いポイントを想像するってことですか。

前田：そうそう。だから、ここの場所が現場からは割と遠そうに見える話なんだけど、でも、読者からしたら割と近い所かもしれないという、変なこう、遠回りしているようで、意外とそういう書き方した方が見やすくなるんじゃないか。

司会：なるほど。でも、いわゆる誰に向けて書くかみたいなことは、結構言われるポイントかなと思うのですが。

○ 「あるある話」の普遍性

前田：「あるある」として読んで欲しいっていうのは、大前提としてあって。「あるある」を読んで面白いと感じてもらえるのは、介助をやっている当事者ですよ。ああ、あるわ、こういうことあるわ、みたいな。ただ、「あるある」話っていうのは、その現場を知っている人じゃなくてもおもしろかったりするわけ。自分の知らない業界の人が、「あるある」話をしているのを聞いているのって、おもしろい。「ようわかれへんけど、何かそういうことがあるらしい」。なんか、そういう現場の「あるある」話をしているのを、端で聞いていて、「ああそういうもんなんや」みたいな。そんなふうにも読んでもらえるのが理想かな。

司会：飯塚さんはどうでしょうか。

飯塚：「あるある」ですね。

前田：「あるある」を聞いて、知らん世界の「あるある」がなんでおもしろいかって言うと、

「確かにありそうやな」みたいな普遍性がたぶんあるんやと思うんですわ、「あるある」話のどっかに。その具体的な現場のことは知らんけど、そういうことってありそうやなっていう想像ができるのが、「あるある」話。

飯塚：「あるある」話をこう、読者とかに対して発信して行って、どうなったら良いとか、そういう狙いとかありますか。本でかなりすごく、リアルにわかりやすく書いてあると思うんですよ。そういう些細な、微妙な動きとか揺らぎとか。

前田：別に俺、「へえー」で良いと思う。そんなことあるんやみたいな。「そういうもんやねんな」っていう。それでも、「おもしろい」にも色々あるからね。たとえば、ある労働現場のルポルタージュみたいなのが「おもしろい」って言った時に、その仕事を自分もやりたくなるとかいうのもあるんやろうけど、別にそうじゃなくても良い。別に介助者を、これを読んで介助やってみたいって思う人を増やしたいとかいうのでもないよね。あるいは世間にその、こういう介助者の仕事っていうのがあるから、その理解を呼ぶとか、深めて貰う、世間の理解を深めて貰うために、これを出しているとかいうのもちょっと違う。何やろうね。

司会：飯塚さんの場合は、明確な狙いがあったということですか。

飯塚：いや、そういうのは元々なかったんですけど、話を聞いていくうちに、変な義務感とか、そういうのはありました。何か、せっかく聞いたのに無駄にしちゃアカンとか、そういう気持ちはありました。それだけじゃないですけど、そういう要素はあったという感じです。

司会：当事者団体では問われないですか。

伊藤：たまには。本当にたまにはあるかなあ。

でも今どき研究者だけが表現手段を持っているわけじゃないから。あんまりそうでもないかなあっていう。自分で表現する人の方が多いし、できるしもう、それこそブログなりネット使ったりとか、やっていますからね、普通に。あんまり自分に、研究している人に何かっていうのは、あまりないかなあ。それでもちょっとは言われますけどね。そんな言うこと聞かないけど。でも何だろう、やっぱり、「直接役に立つことはやっていません」っていうのを、僕は言いますがね。だから、それはたぶんある意味で、「変な期待するな」っていうエクスキューズをしているんだと思うんですけど。

飯塚：すいません。さっき「ない」って言ったんですけど、「これで研究して」っていう感じで言われたことはあります。運動している人にとっては、通訳の必要性はやっぱり伝えたいっていう所があって。通訳が付く付かないで、どういうふうな変化があるというか、そういうのを世に……世って言ったら大きいですけど、伝えたいっていうのは、あるのかもしれないですね。

司会：現場の表し方をどう模索するかという部分で、最後の「あるある話の普遍性」という議論は示唆に富むと思います。司会者は個人的にはそのような現場の書き方をできていないのですが、要は、一見して閉じているように思える現場のリアリティをどのように社会や、他の現場や問題にも開いていけるのか。あるいは既にそのようにあるかもしれない実態をどう描くのかという課題だと思います。それは、私たちがどのようにフィールドに関わっているかとい

う論点と不可分だということ。これは、もうそれぞれの書き手、フィールドワークする人、調査する人に、そのまま返っていく論点かと思います。一応、話としてはこれぐらいで閉じようかなと思いますけど、改めてじゃあ、前田さん、今後の研究のご予定とか。

前田：介助をやっていくうえでどんなふうには、その人が変わっていくのかっていうのを、自分のことを題材に書いて来たから、もうちょっと広げて見るってこと。人がどうやって、それはべつに支援でなくてもいいんだけど、なにか仕事でもいいし。仕事していくうえで、その人がどんなふうに変容していくのかっていうプロセスを、どうやって見ていくことができるかっていう。

司会：なるほど。私たちが「会う・話す」ことによって、いったい何が話されたのかは、追々、読者の方が判断してくれるのではないかと思います。みなさま、今回の企画にお付き合い頂き、ありがとうございます！

(了)